

週日の説教

金 大烈 神父 2010年7月27日(火)

《相手の立場に立った配慮》

『配慮』という言葉がありますね。「相手のために配慮する。」というのは、易しく言えば、相手のために心を配ることですよね。たとえば「これをすると相手の人が悲しむから、これは避けて、その人が喜ぶことをしよう。」と考えることです。

さあ、面白い話をします。

ある人が、両目の周りにアザを作って病院へ行きました。医者が「どうしたのですか。喧嘩をしたのですか。それとも事故にあったのですか。」と聞くと、その人は「いいえ、そうではありません。このアザは教会の中でできたものです。」という答えをしました。医者が不思議に思って「どういうことでしょうか。」と聞くと「祈るために聖堂に入ったのですが、先に来ていた女性が前の席で祈っていました。彼女が立ち上がる時に、スカートの横のファスナーが開いているのが見えました。気の毒だと思い、自然に手を伸ばしてファスナーを閉めてあげようとしていました。しかし、それに気付いた彼女から思い切り肘鉄砲を食われました。それが目の周りにあたったのです。」という答えが返ってきました。それを聞いた医者は「ああ、そうですか。では、もう片方の目の周りのアザはどうしたのですか？」と聞きました。するとその人は「彼女の反応を見て、これは私の思い違いでかえって悪いことをしたのかもしれないと思い、そのファスナーを元通りにしようとしたのです。すると、もう一度肘鉄砲を食わされて、このようになりました。」と答えました。

皆さん笑いましたね。しかし、これは笑い話ではありません。よくある話です。私たちはふつう自分の考えで、「これは配慮だろう。」「これは心配りだろう。」と思いながら相手のために何かをします。しかし、結果は自分の考えと逆になってしまう場合がよくあります。

私たちは、弱い存在です。配慮しながら、相手のために思って行ったのに、自分を責めるような結果が返ってくると「私は善い事をしたのに、なぜその人はそのような反応を見せたのか。」と少し悔しい気持ちになります。しかし私達は、もしかしたら『配慮』という名目で、相手を困らせるようなことをしているのかもしれない。ですから、『配慮』という言葉を使うためには、まず相手の立場に立ってみて、もし自分がこのようなことをされたらどのような気持ちになるか、考えることが大切です。自分勝手に「これは善い事だろう」と思ってすること、たとえば、お腹がいっぱいでもう食べられない人に、「これはご馳走だから食べなさい。」「これは栄養たっぷりだから食べなさい。」と無理強いして勧めることは、『配慮』ではなくてむしろ『迷惑』になります。そのようなことが、人間の愚かさによって、私たちの関わりの中で、今も、これからもたくさん生じると思います。

では、「イエス様の配慮」というのはどのような配慮なのでしょう。イエス様が紹介してくださった「神様の配慮」とはどのようなものなのでしょう。今日の福音(マタイ 13・36-43)で簡単に説明

されていますね。「神様の配慮」というのは、忍耐強く、最後まで私たちを待ってくださることではないでしょうか。神様は、私達が自ら悟り、正しい道に戻るように、ただ無能な姿で見守るだけです。是非この道に来てほしいと頼み、祈る姿を見せるのが、神様の一番大きい配慮だと思います。罪を犯している人に対しては、「やり直して元の道に戻ってほしい」と懇切に願うのが、神様の正しい配慮ではないかと思います。

そのような配慮を見たら、神様は無能ではないかと、思ってしまうかもしれません。なぜこんなに答えがないのか、返事がないのか、なぜ黙って見ているだけなのか、そのように考えてしまうと思います。しかし、忘れてはいけないことは、神様の忍耐には限界があるということです。それは、この世にいる間だけ、という限界です。私たちがいろいろな悪いことをしても、転んでも、神様は待ってくださいます。しかし呼びかけられる時には、冷静に、私たちが見せてきた人生の記録を判断なさると思います。その時に、「もう少し待ってください。」と言ったのでは手遅れであることを意識しなければならないでしょう。

皆様、『配慮』しましょう。いろいろな人々のために心を配りましょう。それは神様のみ旨です。そして心を配るためには、もっと深く考えて、相手の立場になって、また何よりも祈りとともに、本当にこれがその人のために善いことかを何回も考えなければなりません。そのようにしてから実践するのが、失敗を避ける方法ではないかと思います。

ありがとうございました。